

紀州

木の国・根の国物語

中上健次



紀州 木の国・根の国物語

ながみけん じ
中上健次



角川文庫 4559

昭和五十五年六月十日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一（大代表）

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——新興印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0195-145602-0946(0)

紀州木の国・根の国物語

中上健次



角川文庫 4559

目次

有馬	尾呂志	本宮	皆ノ川	朝来	日置	和深	紀伊大島	古座	天満	新宮	序章
----	-----	----	-----	----	----	----	------	----	----	----	----

一五	三三	三三	二九	九	五	七	五	五	三	七	七
----	----	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---

尾鷲

紀伊長島

松阪

伊勢

古座川

十津川

吉野

田辺

御坊

和歌山

高野

天王寺

終章 闇の国家

解説

一五

一六

一八

一九

二〇

二八

三〇

三二

三四

三五

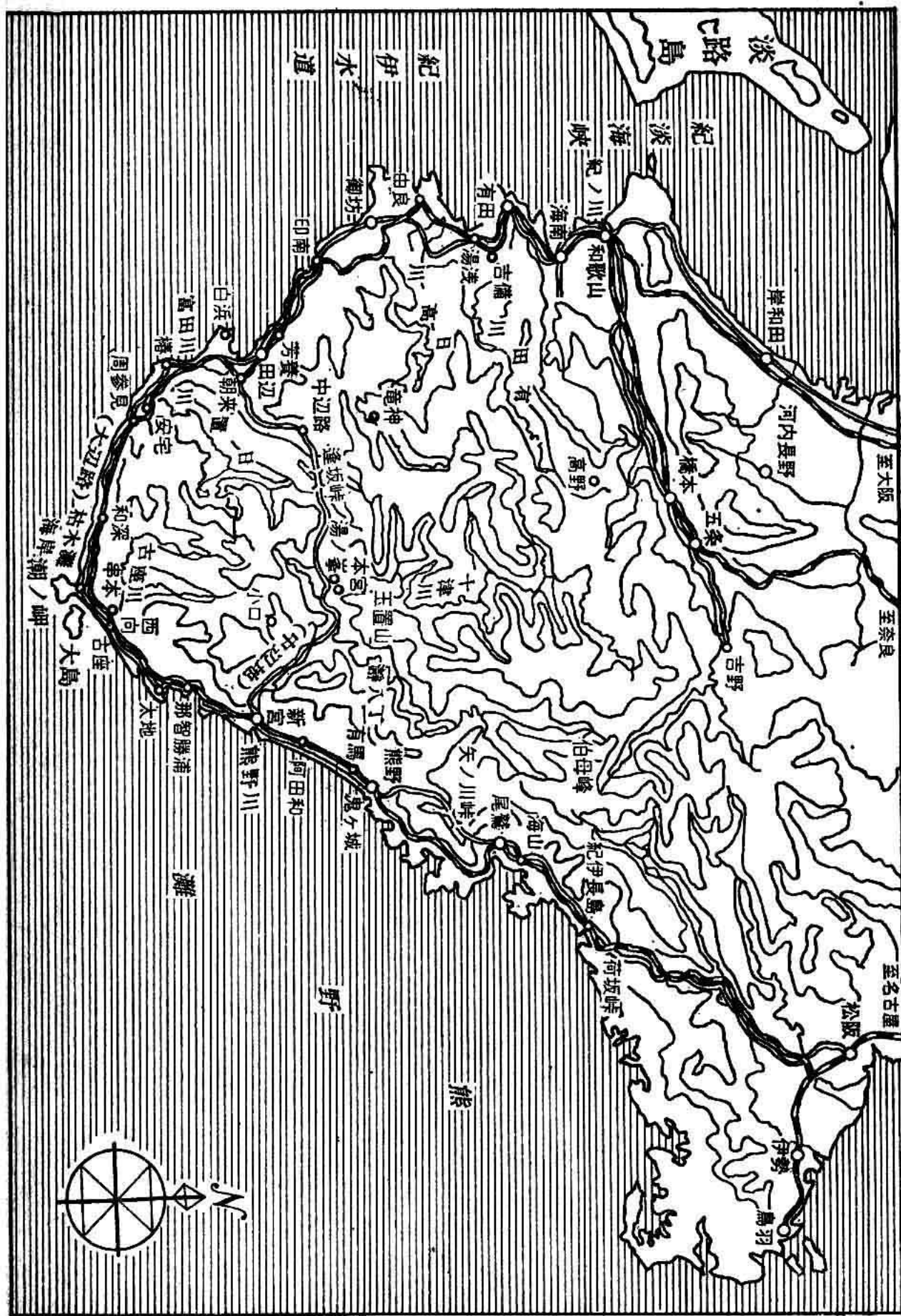
三六

三八

三九

吉本隆明 三一

紀州 木の国・根の国物語



序章

紀伊半島を六か月にわたって廻^{まわ}つてみる事にした。

半島とはどこでもそうであるように、冷や飯を食わされ、厄介者扱^{やくかいもの}いにされてきたところでもある。理由は簡単である。そこが、まさに半島である故。

紀伊半島の紀州を旅しながら、半島の意味を考えた。朝鮮、アジア、スペイン、何やら共通するものがある。アフリカ、ラテンアメリカしかり。それを半島的狀況と言つてみる。大陸の下股^{したまた}、陸地や平地の恥部のようにある。半島を恥部、いや征服する事の出来ぬ自然、性のメタファとしてとらえてみた。いや、紀伊半島を旅しながら、半島が性のメタファではなく性という現実、事実である、と思った。たとえば一等最初に降りた土地、新宮^{しんぐう}。その土地で半島を旅する男、私が生まれ、十八歳まで育つたので、これまでも新宮と覚しき土地を舞台に小説を書いたが、そこを征服する事の出来ぬ自然、性の土地だと思つた事はなかった。熊野川^{くまの}は女の性器、睦^{もつ}のようにある。尾鷲^{おゐせ}の、借錢に困つた女が、あの上田秋成^{うへだあきなり}の『雨月物語^{うげつ}』卷之四「蛇性の姪^{じやせいのいん}」の場所、浮島^{うきしま}の遊廊^{ゆうかく}に身売りされて来たからだけではない。

そして半島をまわる旅とは、当然、さまざまな自然とそれへの加工や反抗、折り合いを見聞きする旅である。観光用の名所旧蹟きゅうせきには一切、興味はない。私が知りたいのは、人が大声で語らないこと、人が他所者よそものには口を閉ざすことである。

とある村ではレプラの話を書いた。

とある村では、バイオリンに使う弦ゆんづるの最初の作業過程を見、切り取った肉のまだついた馬の尻尾しつぽから毛を抜きとる青年にあった。腐肉のにおいのたつ工場で、塩洗いしてあるという尻尾の、塩の味を知りたくて、毛をなめた。

紀伊半島、紀州とは、いまひとつの国である気がする。

まさに神武じんむ以来の敗れ続けてきた闇やみに沈んだ国である。熊野・隠国こもりくとはこの闇に沈んだ国とも重なってみえる。その隠国の町々、土地土地を巡り、たとえば新宮という地名を記し、地霊を呼び起こすように話を書くとは、つまり記紀の方法である。

何度も言うが単なる観光旅行でもないし、風土記でもない。むしろ、アメリカの作家ウィリアム・フォークナーが、ミシシッピ州ヨクナパトーフア、ジェファアソンの地図をつくり、フォークナー所有と記す方法と似ている。

神武のように私が、地名に記す新宮や紀伊天満てんまや、古座こざを征服し、同時に稗田阿礼ひえだのあれのように語り書くともあるし、私は単に、見えない神武、見えないスサノヲに従って、語り書くだけであるとも言える。

ミワサキ、ウグイ、ナチ、テンマ、カツウラ、タイジ、見なれた漢字を取り払い、音だけにすると、この半島の隠国、敗れて闇に沈んだ国の異貌がみえる。コザ、ヒメ、タコ、ワブカ、スサミ、アッソ、町の名はそう続く。何やらその地名の発音は、南島のもののようにみえるのである。

旅の出発点、新宮に着き、一等最初に話をきいたのは、サン婆さん^{ばあ}だった。どんな予備知識もないし、準備もなかった。

私は自分の姉の嫁ぎ先に、ちょうど私の小説『枯木灘』や『岬』のひき金になった七、八年前の殺人事件のいきさつを話してもらおうと、行ったのだった。その事には、私なりの企み^{たくら}があった。その殺人事件が、腹と腹をこすり合わせる新宮という土地の象徴でもあると思うし、事実を記そうとするルポルタージュ、いや、ドキュメントによって、小説を喰^くい破り、さらに小説を補強する、そう思ったのだった。訪ねて行った姉の嫁ぎ先には、人はいず、それで、サン婆さんの家の玄関をあけた。私はそこでは遊行の者に似ている。遊行の者と違うのは、芸もなしに、門先で、人の話にあいづちを打ち、一緒にわらい、一緒に泣くことである。

サン婆さんは今年九十歳、明治二十二年の生まれである。大柄にみえる。話しはじめるとかっちり肥った顔の頬^ほに赤みがさす。

サン婆さんは三重県相野谷^{おのだに}の大里、熊野山中の出身である。サン婆さんの一生とは、手のつけようのない自然が何をするにもまずある、紀伊半島に住む人の典型でもある。六人きょうだいの

真ん中に生まれ、十五の時、男親に死なれ、郡長の家に女中奉公に出た。結婚したのは二十三の時、兄の紹介だったが、嫁入りの夜、雨が降った。杉皮ぶきの屋根から雨がもり、花婿がミノカサを着て屋根をなおしに行った。

「自分の坐^{すわ}ったあるとこに雨やふってきて、涙こぼしての」とくやしがる。

「もうこんなおしげたとこへ来て、みたことも会うたこともないとこへ来て」

新婚当時、夫は山の下刈^{した}り、筏組^{いかだぐみ}みなどの仕事をしていた。

米が一升三十銭の頃、下刈りは日当十五銭、筏組みは六十銭、当然、「わしも働かんならんわい」

サン婆さんの手は大きくて指は太い。働きづめで九十の今に至っているからすっかりした手なのか、そんな手だったから、共稼^{ともかせ}ぎを苦と思わなかったのかもしれない。

北海道へ行ったのは、あれが一歳の時だから、と六十一歳の長男を引き合いに出して言う。サン婆さんは北海道に六年いたことになる。なにもないところで、「山で木を切って、小屋つくって」とフンゼンとした。

「三つの子負うて、五つの子連れて、家へ帰ろと思^{おも}て、駅へ何回いたかわからん。駅員に、みんな来た時はつらかったんや、いまはお金あったら米買えるけど、わたしら買おうと思ては買えなんだんさか、ジャガイモふかして食べたんや、しんぼうしなあれと、なだめられたん」その駅

まで一里はある。

或る時、豆の畑に監獄部屋からの脱走者がかくれていた。警官やろか、立ちん棒が馬に乗って追わえ、自転車を追わえてくる。這^はって逃げるのはみえたが、立ちん棒に訊^きねられ、「知らん」とサン婆さんは言う。見つけ、つかまえたら、さかさまにつるして、下から火をあぶって殺すらしい。三人に一人、立ちん棒がつく。

今の天皇陛下が北海道に視察に来た事がある。アイヌが十勝^{とかつ}の川を丸木舟で渡ってみせたのを憶えている。

兄に金をウヤムヤにされたりして六年で北海道からもどり、夫は新宮の木場に働きに行く。一日一円十銭、家賃月三元、また共稼ぎである。日清は大里で知り、日露では郡長さんの家で知り、アメリカとの戦争はこの家で経験した。この家の最初の嫁と孫は空襲の爆弾で死んだ。二十年四月七日午前十時十五分。爆弾で死んだ日を細かく記憶している。嫁は腹が立ち割れ、孫は足をなくしジフテリアで半年後死ぬ。

正月の元日に気分が悪いと夫は言って寝込み、三月十三日、朝三時四十八分に死ぬ。十年前の事である。やさしい夫だった。頭ひとつ張られた事はない。

「手らふりあげたら、うちへ行こ、うちへ行こと思たんやのに」とわらう。働きに働いたが、「尻^{しり}に敷くだけの土地ひとつあったら遊ぶのが仕事や」と、わらう。

旅の出発点と選んだ新宮の、その出発点がサン婆さんである。サン婆さんの語る一代記は、し

っかりと書き込まれたリアリズム小説のような味がある。そしてこのサン婆さんの話からも、半島が半島であるという半島的情況が抽出できるのである。それを「彼方」^{かなた}の思考とでも言おうか。たとえば朝鮮半島の人間たちが彼方の日本に密航してくるようである。

北海道は彼方である。ブラジルやアメリカは彼方である。いや補陀落^{ふだらく}は彼方である。彼方に甘い話があったとしても、いや、たとえ彼方に人があこがれても、滅多に人は出かけるものではない。彼方の甘い話にイチかバチかでかけてみるほうが、ここよりもマシ、というのだろうか？ 北海道、千葉に、紀伊半島と同じ名がついた土地がいくつもある。

紀伊半島は海と山と川の三つの自然がまじりあったところである。平野はほとんどない。駅一つへだてるとその自然のまじり具合がことなり、言葉が違い、人の性格は違ってくる。古座の空^{から}浜、天満の出腰^{でこし}、新宮のキツネ。そうハヤシ言葉にあるが、古座の海では魚が獲れず貧乏で、天満は重い物を持つ仕事をするせいか腰がまがっていて、新宮はキツネのようにズルがしこい、ということだろう。三つの土地に共通するのは、船の出入りがあった事だろうか。キツネといえ、こんなシャレた文句もある。

新宮のキツネは尾のないキツネ

わしも二、三度だまされた

雌ギツネか雄ギツネか分からぬが、このシャレた文句を、雌ギツネと取ると、観光地ではないが、材木商たちの取引場所であり、金の捨て場であった大王地だいおうじという花柳界を持つ新宮が浮かんでくる。材木と共に栄え、材木が新宮に降りて来なくなつてからは衰退しはじめた大王地は、隠国、闇の国ともつながつてある。

その大王地の「養老館」とは、幸徳秋水や大石誠之助おおいしせいすけが、酒を飲んだところである。大逆事件は、大逆という汚名を着せ、キリスト教徒や新思想者を拘引処刑することによつてイメージとしての隠国を熊野にひき落とし、地方分権、地方文化を一挙に中央集権化したものと私は取る。たとえば、その大王地の芸者である。

繁昌はんじやうを誇つた材木商らは、芸者に京風の舞妓姿まいこをさせて、江戸東京にするものぞという気持ちにはあつたはずである。筏の組み方や材木の扱い方はこの土地から、江戸東京に教えてやった。

紀伊半島、紀州をめぐる旅とは、なにが紀伊でなにが紀なのかを知ることであり、紀伊半島、紀州の歪みゆがみをさぐる旅でもある。その紀州、紀州人に感じている歪みを正直に伝える事に心もとないが、たとえば大逆事件の大石誠之助を愚者と言ひ、「われの郷里は紀州新宮／渠かれの郷里もわれの町」(「愚者の死」)と歌う佐藤春夫である。

『殉情詩集』の天才詩人として出発し、『田園の憂鬱』等の美しすぎる傑作を書いたが、何やら小説家ではなく天才詩人のまま不帰の人になつた気がする。

私の畏敬する谷崎潤一郎より資質や才能が劣っていたわけではない。

春夫をみていると、絢爛と咲くべきだった小説の花が、何ものかに奪われた気がする。花が漢詩漢文脈の方に消えた気がするのである。

それをいまひとつ造語すると、熊野という観念の力とでもなる。

「われの郷里は紀州新宮／渠の郷里もわれの町」熊野という観念の力、熊野という歪みの力は、春夫の生まれたところから五百メートルほどのところで生まれた私にも充分働いているはずである。佐藤春夫論とは一度は試みてみたいテーマではあるが、いまそれを論ずる時ではない。

隠国・熊野は何やら熱がある。

人を破壊する。

山を歩いていると山は美しすぎる。山の突出した岩肌は、ごつごつし、どんなマストラヲも耐えられなくなる。人の力などしれたものだ、そう思う。

『日本霊異記』にある、山中で足首に縄を巻いて崖つぶちにぶらさがり法華経をとらえた男の話は、現実である。もちろん今のこの私が、『霊異記』に書かれてある事と同じ場面を見た、出喰わしたというのではない。いや、紀州熊野をめぐる旅とは霊異の世界に入り込む事でもあるから、その法華経を憶持する骸骨の、朽ちることのない赤い舌を、視る事は可能でもある。その骸骨がいま一人の私の姿であつても不思議ではない。そう言えば、山中を歩いていて、疲労の為に、死んだ近親の者や愛しい者が歩いてくるといふ幻覚に出喰わしたとよく聴く。

靈異というものを、いま一度ひらいて説明するなら、生と、性と聖と、そしてその裏にある死と死穢しえと賤せんなるものの事であらう。生は絶えず死に転成するし、死は生に変転する。

中辺路なかつへちを這うように湯ノ峯ゆのみねに来て、湯に入り蘇生そせいする小栗判官おぐりはんぐんとは、その靈異の典型であらう。聖なるものの裏に賤なるものがある。賤なるものの裏に聖なるものがある、とは小栗判官でもあり、日本の文化のパターンでもあらうが、紀州、紀伊半島をめぐる旅とは、その小栗判官の物語の構造へ踏み込む事である。道すじに点在する被差別部落をめぐる旅にもなる。被差別部落が、冷や飯を食わされ続けて来た紀州、紀伊半島の中でも一等半島的情況、紀伊という歪み、特性が積み重なったところでもある、と私は思っている。

差別、被差別、言葉としてはそうあるが、どこからどこまでが差別であり被差別なのかはつきりつかめない。これも靈異の一種である。

差別の構造とは何か、これもまたここで論じる時間はないが、この日本において、差別が自然的生みだすものであるなら、日本における小説の構造、文化の構造は同時に差別の構造でもあるあらう。紀州、紀伊、たとえば何の変哲もないこの地名を指す言葉である。たとえば、これに差別、被差別という回路をつないでみると、紀は、記であり、木、氣、鬼と分光される。紀州とは鬼州、鬼らのバツコするところである。鬼とはまた闇のもの、陰、オンの変化したものであるあらうが、私は、むしろその闇から日なたに抜け出た取りすまし顔の者と取る。

こういう読み方はどうであらう？